

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Chinese Borrowings in the Spoken Language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野元, 菊雄, NOMOTO, Kikuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001715">https://doi.org/10.15084/00001715</a>

# 話しことばの中での漢語使用

野元菊雄

## はじめに

日本語の語彙に占める漢語の勢力は無視できない。「言海」の見出し語では和語の5分の2が漢語だという（講座日本語Ⅱ「日本語の構造」のうち林大「日本語の語彙」）。これは、辞書の形で登録されたものだが、実際に使われているうへでは、たとえば、新聞にあらわれた自立語の延べ使用度数で漢語は40%に達しているし、また語の種類（異なり）では50%に及ぶだろうという（同上）。総合雑誌の語彙調査から見ても、大体これと同じような結果を得るだろう（国立国語研究所報告13「総合雑誌の用語、後編」）。

話しことばでは、書きことばよりは漢語の使われることの少ないことは常識でも見当がつく。また、国立国語研究所のいくつかの語彙調査の、使用度数の高い語彙と、同じく、白河市・鶴岡市などのいわゆる24時間調査での使用度数の高い語彙とを比べてみてもこれはわかる。しかし、實際上、何%ぐらいの漢語が使われているかの数字については、今までのところ、あまり資料はないようだ。

以下は、この問題について、いささか手をつけたものだ。

## 方法

### 1. 材料

材料としては、国立国語研究所などが、1953年度に愛知県岡崎市でやった、敬語調査で得た反応文を使った。この調査は、文部省科学総合研究費補助金の交附を受けてしたもので、結果などは、国立国語研究所報告11「敬語と敬語意識」として発表されている。この文では、この報告書にすでに述べてあることはなるべく省略して、必要に応じて、この報告書の該当ページを示すにとどめ

る。報告123とあれば、この報告書の123ページ（以下）を見よという意味。

話しことばの資料としてはなお、国立国語研究所の話しことば研究室で研究材料としている談話語のテキスト（国立国語研究所報告8「談話語の実態」）や雑誌「言語生活」の「録音器」欄などがある。しかし、前者は1話題は長いけれども事例が少なく、個人の癖が強く出すぎ、また社会的要因などによる分析に耐えないうえ、話しことば全体を代表させることは必ずしもできない。後者は、話者の社会的要因そのものがわからないことが多い。

ここで使った材料は、これらの欠点はない。すなわち、岡崎市を代表するように選んだサンプルであって、この観点からの分析に耐えられる。しかし一別の欠点がある。それは、この材料は、これこれの場面でこういうことを言うのにどう言いますか、と質問して、その答を書き取って来たものだということだ（報告133）。すなわち、純粋な話しことばとも言えない、という点だ。しかし、純粋ではないまでも、形としては話しことばなので、今これを使うことにした。

この調査では、このような調べを13場面についてしている（集計したのは12場面）が、全部について漢語使用を見ることは時間的に不可能だったので、次の7場面に限ることにした。すなわち、「医者」「傘貸し」「物売り」「先生」「議事堂」「道教え」「傘忘れ」。これらが具体的にどんな場面かについては、報告136以下を見よ。

この12場面は、日常生活の代表と考えた（報告271）わけだが、そこから更に引き抜いてこれを代表させようとする。12場面のうち、平均段階点（報告246）で、高い方（すなわち乱暴な方）・低い方（すなわちていねいな方）からそれぞれ2場面、中間から3場面を材料とした。敬語の調査でないのに、敬語の段階点を目安にした点に多少の問題は残るが、材料が敬語の調査で得られたので敬語と漢語との関係を調べるうえからは便利だと思う。

## 2. 数量化

漢語使用の程度を数量化するために、使用率ということ考えた。上に述べた7場面の総文節数（橋本文法の文節）に対して、自立語の漢語を含む文節数が何%あるかを示す数字を、その個人の「漢語点」として集計の基礎とした。

計算の便を考えて、単位は%までとし、以下は4捨5入する。

計算の基礎が%だということは、多少弱い点もあるが、文節数がまちまちなので、同じベースの上に立たせるためにこの方法をとらざるを得なかった。計算にあたって、たとえばあるカテゴリに属するすべての人の文節数と漢語を含んだ文節数とを合計して、総文節数で割って、そのカテゴリに属する人の漢語率を出すこともできる。しかし、これでは、計算に多くの時間が必要となるので、今ここでは、こういう方法をとらなかった。この方法と「漢語率」という語を使うとまぎれるおそれがあるので、「漢語点」ということにした。

## 結果

### 1. 漢語点の分布と平均

上のようにしてつけた「漢語点」がどのように分布しているのかについて、第1表に示そう。

第1表

漢語点	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
人数	1	1	1	6	14	15	33	33	33	44	39	44	40	
%	0.2	0.2	0.2	1.4	3.3	3.6	7.8	7.8	7.8	10.4	9.3	10.4	9.5	
	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	29	計
	24	18	18	23	7	6	5	1	6	3	3	2	2	422
	8.7	4.3	4.3	5.5	1.7	1.4	1.2	0.2	1.4	0.7	0.7	0.5	0.5	100.0

これでわかるように、分布は2点から29点にまで及んでいる。0点がないことは注目していいことと思う。すなわち、漢語を全く使わないでは、日本語では話ができないのではないかと、ということを示していると見ていい。

この分布から計算すると、平均漢語点は12.67、標準偏差は4.37となる。少なくとも岡崎市のような中小都市の住民は、約13%の漢語を使っている、ということになる。これを、前にあげた書きことばの数字と比べれば、非常に少ないと言える。

### 2. 文節数との関係

ここで見ようとするのは、長い文に漢語が多くあらわれるか、それとも短いものにあらわれるか、ということだ。結果は第2表のようになる。

第2表

文節数	88—71	69—65	64—60	59—55	54—50
平均漢語点	14.71	13.71	11.30	14.09	13.82
分散	5.1873	12.0359	16.2100	11.9264	19.8258
人数	7	7	10	11	22

  

49—45	44—40	39—35	34—30	29—25	24—12
11.90	12.43	12.69	12.56	12.72	13.11
28.4880	15.6275	19.0463	19.2881	29.1378	47.9057
51	68	85	96	47	18

文節数は88から12に及んでいるが、第2表にかかげたような区分をした限りでは、それほど目立った傾向はないように思われる。予想したところでは、文節数の少ない方では比較的漢語点が高いのではないかと考えた。すなわち、「電報用紙」とか「議事堂」などという、どうしても必要な漢語が考えられるからだ。ところが、実際には多少その傾向はあるかも知れないが、大したものではないし、逆に、文節数の多い方に漢語点の高い傾向もある。これは、必要最小限を越えると、また余計ものとして漢語が出るかとも考えられる。とはいえ、これらははっきりした傾向と称することはできない。逆に言えば、これは「漢語点」で算出したことが全体の結果をそうゆがめるのでないことを示すものと思う。

### 3. 社会的要因との関係

#### a. 性

昔は婦人はあまり漢語を使わなかった、とされている（林大、前掲論文）が今はどのようか、ということを見る。結果は第3表のようだ。

第3表

性	男	女
平均漢語点	13.55	11.83
分散	20.9558	16.9261
人数	206	216

ここでは、一往男女間に有意差（信頼度95%、以下同じ）があると認められる。すなわち、女よりも男の方が漢語を使う傾向がある

と見てさしつかえない。なお、女の分散の方が小さいことも注目してよからう。

**b. 年齢**

老人のことにばに漢語が多いように思われがちだが、果してそう言えるかについて、第4表にあげてみよう。

第4表

年齢	10代	20代	30代	40代	50以上
平均漢語点	11.18	12.87	14.03	13.10	12.17
分散	16.2640	18.6358	18.9059	18.2282	19.3279
人数	78	110	79	68	87

10代と20代との間を除くと、隣の年齢層の間には有意差はないが、30代を頂点として両側に低くなっている。これは偶然のことではないと思われる。いろいろの言語能力が大体最高に達するのは、この年齢層だと考えられている(『人類科学』Xのうち野元菊雄「青年の言語能力」)。漢語点がここで高くなっているのも、おそらくこの反映だろう。

**c. 性×年齢**

ここで、上の2つの要因を組み合わせることにしよう。すなわち、各年齢層を男女の2つに分けて計算してみるわけだ。結果は第5表にあげるようになる。

第5表

年齢 性	10代		20代		30代	
	男	女	男	女	男	女
平均標準点	11.27	11.10	13.11	12.63	15.76	12.50
分散	16.3114	16.1802	20.7886	16.0572	16.1359	16.5357
人数	37	41	56	54	37	42

40代		50以上	
男	女	男	女
14.13	12.19	13.73	10.58
21.4056	13.4872	17.3507	16.1799
32	36	44	43

男が30代で最高に達するのに対して、女が20代で最高なものもおもしろい。これは、前掲の「青年の言語能力」でもふれたように、女の方が男よりも、年齢的に早く能力の最高に達するという、一般的傾向をそのまま反映していると思われる。

10代で男女の差があまりないのもうなずけるところだが、どこでも女の方が高いところがない点も注意したい。なお、30代と50以上とでは、男女間に有意差がある。

#### d. 学歴

上に言語能力のことを書いた。常識的には、学歴が高ければ言語能力もまた高いと考えられるが、漢語点についてはどうなっているかを、第6表で見てみよう。

第6表

学 歴	なし	小学校	高小・新中	旧中以上
平均漢語点	11.71	11.43	13.07	12.90
分散	21.0188	17.2090	20.2575	20.6119
人数	14	89	182	137

これを見ると、それほどはっきりした傾向というほどのことはないように思われるが、それでも、「小学校」と「高小・新中」との間には有意差があり、ここに1つの断層があるようで、この境界の上下に差は一往認められる。しかし、「学歴なし」の人でも、それほど漢語を使う点では劣っていないことになる。もっとも、ここでいう漢語は、非常に日常基本語彙的な漢語であることは言うまでもない。

#### e. 職業

職業による差は第7表のとおりだ。

第7表

職 業	勤め人 公務・自由	商店主	製造業者	工員・運転手
平均漢語点	13.52	13.40	13.06	13.35
分散	20.0350	19.9719	22.4989	22.3132
人数	63	47	16	84

日雇・その他	農業	学生	主婦	なし
10.11	12.43	11.13	11.86	13.38
10.4546	18.9713	12.6231	10.0029	30.7978
18	21	48	80	45

「勤め人」「商店主」などが高いのと、「日雇」が低いのは常識的だが、「工員」が高く、「学生」が低いことは案外だった。「学生」が低いのは、10代という年齢層が漢語点が低いのに原因しているのではないかと思われる。

#### f. 階層

階層を上下5段階に分けたとき、どのような漢語点があらわれるかを第8表に見よう。

第8表

階層	上 ← 1 2 3 4 5 → 下				
	平均漢語点	13.63	12.67	12.81	12.48
分散	14.7416	21.5091	18.9444	19.4472	16.9594
人数	27	79	173	81	59

社会的な階層が高くなるにつれて漢語点が大体高くなる傾向があるようだがこれは、階層が、言語的教養という点に反映するためかと思われる。しかし、この問題についても、それほど大きな差が一番高い階層(1)と一番低い階層(5)の間がないことは注目していい。一体、この漢語点は、他の言語能力をあらわす点よりも、最低・最高の差が小さいのが特色かと思われる。つまり、日本語を話すためには、だれでも、ある程度の漢語は使わなければならないのだ。

#### g. 出生地・居住経歴

結果は第9表のようだ。

第9表

	出生地			居住経歴		
	岡崎	三河	その他	移動なし	中間	転々
平均漢語点	12.64	12.47	13.10	12.36	12.50	13.40
分散	19.7091	18.6058	18.2710	18.9985	21.3489	15.1000
人数	188	150	84	138	182	100

出生地はほとんど関係がないと見られる。これに対して、居住経歴では移動がはげしいほど点が高いという一定の傾向が見られた(有意差はない)。居住経歴の「転々」の方がていねいなことばを使う傾向があり(報告271)、また社会階層的にも高いものが多いと思われる点からして、これは当然のことと言えよう。

出生地の「その他」がやや高いのは、おそらく、これが必然的に居住経歴で「中間」「転々」となるからだと思われる。すなわち、岡崎市や三河の点が低いのではない。その「転々」の人の出生地で「移動なし」の人をこのように調べたら、岡崎市の「移動なし」の人と大差ないのではなからうか。これを足がかりに大胆な予想をするならば、岡崎市の平均漢語点は、同じような市民構成であれば、全国どこでも大差ない、ということになるうか。移動できる、ということ、渡り者という意味でなく、むしろ社会的に高い位置を持つ。

#### 4. マス・コミュニケーションとの関係

##### a. 新聞

新聞を読むか読まないかは、当然漢語使用に影響しよう。林大の前掲論文によっても新聞の漢語率は高いから、これは当然予想できる。その実際を第10表

第10表

に見てみよう。

新聞	毎日読む	ときどき読む	全然読まない
平均漢語点	12.94	12.00	10.48
分散	18.6960	15.3235	18.1006
人数	308	68	29

「毎日読む」と称する人が案外多いが、それはともかく、「毎日読む」と「全然読まない」との間には有意差がある。この点では常識的な結果

だが、その差が他の言語能力に比べて大きくない点にもう一度注意しておきたい。日常的な漢語は、かなり基本語彙化しているから、と解釈してよからう。

すなわち、ある範囲の漢語は、前にも述べたように、使わなければ、話が全く、できないのである。

##### b. ラジオ・映画

この2つは同じマス・コミュニケーションといっても、その文化的な位置・意義は新聞とは大いに違っている。これが、第11表の漢語点にもあらわれている。

第11表

	ラジオのニュース			映画		
	毎日聞く	ときどき聞く	全然聞かない	よく見る	たまに見る	全然見ない
平均漢語点	13.13	11.99	12.40	11.08	12.96	11.92
分散	20.7019	15.5980	20.7733	14.1959	16.0846	22.4917
人数	243	148	30	53	302	64

映画では、「よく見る」人が漢語点で一番低いというようなことになっている。10代が見る方にかたまって、それがきいたという事情もあろう。

ラジオの方も論理的な結果が出ていない。

## 5. 社会的態度との関係

社会的態度とは、進歩的か保守的か、あるいは開いているか閉じているか、などのことだ。ここではいくつかの問のうち代表として、男女共学に対する賛否と、支持政党別による集計を、第12表としてかかげる（なお報告114）。表では、それぞれ左の方を進歩的と認める。

第12表

	男女共学		支持政党		
	賛成	反対	革新	保守	なし
平均漢語点	13.04	12.30	12.99	12.94	12.40
分散	20.2777	18.2283	13.6435	20.4707	20.0437
人数	238	164	73	175	163

男女共学は「賛成」の方が有意差をもって高い。このグループは、学歴・階層とも高い（報告 115）し、敬語の点でもていねい（報告 268）なのを反映していると見てよかろう。なお、進歩的意見の人の方が、敬語の使い分けの能力も高い（雑誌「言語生活」70号野元菊雄「敬語の使い分けの能力」）。

しかし、支持政党の方は、上に述べたことから予想されるようには大きな差が出ていず、漢語使用の点ではその傾向はあるがほとんど差がない、という結果となった。

## 6. 敬語行動との関係

### a. 標準点から

標準点（報告 215）のある段階ごとにまとめて漢語点を出すと、第13表のようになる。

第13表

標準点	10~7	6~4	3~1	0	-1~ -3	-4~ -6	-7~ -10
平均漢語点	10.40	12.80	12.84	11.40	12.85	13.40	13.00
分散	10.8400	17.0489	19.5356	22.4800	26.0275	14.1900	5.3333
人数	20	90	167	50	60	20	6

表では左の+10の方がていねいなことばを使うのだが、この表にあらわれた限りでは、何ら組織的な傾向を見出すことはできない。すなわち、ことばのていねいさと漢語点とは関係はほとんどないと認めてよかろう。

これは、漢語の使用度を、いくつもの場面を合計して算出したからか、とも考えられる。報告 245 で述べたように、ある特定の部分が漢語かそうでないかは、ていねいさに幾分かの関係があって、漢語を使う方がていねいだとすることができが、特定の部分でなく、全体の漢語となると、相当薄れてくるものだろう。

#### b. 適応点から

適応点（報告 215）による差は、第14表のとおりだ。

第14表

適応点	12~11	10~9	8~7	6~5	4~2
平均漢語点	13.34	12.92	12.86	11.54	10.89
分散	22.4237	21.2421	18.6474	8.4534	2.6301
人数	58	178	111	48	18

ただていねいに言うかどうかだけを見る標準点と違って、適応点は、その場面のていねいさの大勢に従っているかどうかを示すものだから、やや知的な能力を反映すると思われ、これが漢語点にもあらわれている。第14表では、左の方が適応度が高いが、その区分けのうち、互に隣のもの間には、「8~7」と「6~5」との間を除いて有意差は見られないが、第13表で見た「標準点」との関係とは違って、傾向的な差を示し、1つおいて隣とは有意差を示すものが多い。

### c. 使い分け点から

使い分け点（報告 267, 野元菊雄の前掲論文）は、場面による使い分けがうまいかうまくないかをあらわすものだ。これもそれ故、知的な能力と関係がある。結果は第15表に示す。

第15表

使い分け点	+2	+1	0	-1~-2
平均漢語点	13.22	12.91	12.09	12.00
分散	19.8483	18.9563	18.9348	17.6000
人数	60	221	91	50

この場合は、どの間にも有意差はないが、傾向的な差はある。すなわち、使い分けがうまい（表で左の方）ほど漢語点が高いという傾向がある。ただし、「適応点」との関係より薄い。この理由ははっきりしない。

## 7. 敬語についての知識との関係

敬語についての知識といっても、短い文の中でどの部分が敬語であるかを指摘するだけのもの（報告 194）だが、これと漢語点との関係を、第16表に見よう。

第16表

知識点	12~10	9~7	6~4	3~1	0
平均漢語点	12.79	12.84	12.73	13.78	10.34
分散	18.9159	19.1344	18.1260	21.6998	13.3283
人数	82	124	123	51	41

言うまでもなく知識点の高い方が敬語についての知識が高いのだが、知識点「3~1」が異常に漢語点が高い。「0」が低いのは常識的だが、その他はあまり傾向的な差があるとは言えない。このような意味での知識と漢語使用とは関係が薄いことになる。

## 8. 敬語についての意見・内省との関係

### a. 意見

家の中でも目上の人などには敬語を使うべきかどうか、また人称代名詞を日本語では将来使い分けた方がいいかどうか、という問（報告 196）への答と、

漢語点との関係を第17表に示してみる。

第17表

	家の中で目上に			人称代名詞	
	使うべし	時・相手・ 場合による	使わなくて もいい	使い分けた 方がいい	使い分けな い方が いい
平均漢語点	12.44	13.47	12.59	12.82	12.85
分散	19.7712	17.3891	19.8669	20.9753	15.6293
人数	181	100	128	260	137

「家の中で目上に」の方の「時・相手・場合による」というのが、有意差はないながらも高いのは、この答が、敬語についてもっともうるさい意見だからかも知れない。「人称代名詞」の方は全く関係がないと言っている。

#### b. 内省

自分の家では家族の間で敬語を使うかどうかを反省して答えたもの（報告196）と、漢語点の関係を次に見ることにす

第18表

る。結果は第18表。

これもあまり関係が深いとは言えないようだが、これは、言わば当然のことと思われる。

家で家族に	使う	使わない
平均漢語点	12.79	12.63
分散	19.7640	18.4472
人数	158	251

#### 9. スライド調査の結果との関係

スライド調査は、スライドで与えられた場面での会話を聞いて、その言いかたについて批判などをしたものだ（報告171）。全部で66問あるので、ここではごく1部との関係を見ることにする（第19表）。

表の（7）は「医者」の家に往診を求めに行ったとき、聞かせたうちのどれで言うか。

（35）は社長と社員との会話で、2人のことばのていねいの度合いが近いものと遠いものとの聞いて、どちらが適当と思うか。

（44）は（7）と同じものを、若い男の言っているものとして聞いたとき、どちらが適当と思うか。

（52）は上と全く同じことばを4～50代の女の人が言っているのを聞いたときにはどちらが適当と思うか。

という問だ（具体的な刺激文については報告 174 を見よ）。

第19表

	(7)		(35)		(44)		(52)	
	ていねいな方	ていねいでない方	ていねいな方	ていねいでない方	ていねいな方	ていねいでない方	ていねいな方	ていねいでない方
平均漢語点	12.11	12.43	11.23	12.42	11.71	12.65	11.64	12.92
分散	22.7412	18.7977	18.1252	21.1997	18.5676	19.1623	18.0751	19.3861
人数	89	76	106	57	72	92	85	80

この4問を通じて言えることは、これも有意差はないものの、すべて「ていねいでない方」を言う、あるいは適当とした方が高くなっている、ということだ。これはおそらく偶然ではなく、何でも「ていねいな方」にしておくという方が言わば批判力がないのであって、漢語点はこれを反映しているのかと考えられる。

第20表

(19)	適当	不適当
平均漢語点	11.73	12.68
分散	20.4071	21.7331
人数	60	97

このことは、客間でマダム2人が、バカバカしくていねいな、いわゆる、「ざまますことば」を使って会話しているのを聞かせて批判させた(19)と漢語点との

関係によって、確かめられると思う(第20表)。

このような会話を「不適当」とする方が言わば批判力が高いわけで、この方が有意差はないが漢語点も高くなっている。

## 10. パーソナリティとの関係

パーソナリティと言っても、敬語調査でしたもの(報告 102)との関係だ。一例として、スライドによるパーソナリティ調査(報告 109)の結果との関係を見よう(第21表)。

第21表

パーソナリティ点	6	4	2	0
平均漢語点	12.47	12.74	11.83	11.23
分散	21.7718	25.1605	17.4400	7.4256
人数	66	47	36	13

パーソナリティ点の高い方が、ていねいな行動と結びつくものだが、第21表では、ていねいな方がやや漢語点が高いようになっているものの、組織的とまではいかない。その他のパーソナリティ調査との関係も、はっきりした結果を示していない。

敬語調査で必要なパーソナリティのつかみかたはまだ不十分であり、言語研究でのこの分野での発達が期待される。上の結果から、漢語の使用度とパーソナリティとが無関係だ、と直ちに決めることはできない。漢語というものに一種の権威性があるものならば、当然、パーソナリティとも関係があると思われる。

ここで見たパーソナリティは、すべて敬語との関係を主としてねらったものだった。漢語の使用度と関係させるならば、本来なら、そのためのパーソナリティ調査をしなければならない。上で述べたいろいろの結果についてもこの点は全く同様で、本稿が副次的な成果であるための資料的制約は避けることができなかった。話しことばの中での漢語の使用度を目的とした調査が改めて期待される。